

能面と能装束 — 武家の式楽 — 前田育徳会尊經閣文庫分館 第2展示室

特集展示 書家 青山杉雨 第6展示室

石川県の工芸 第5展示室

- 2月前半の展覧会
- 今月の企画展示室
- 行事案内
- 平成22年度友の会会員募集
- 移動美術展
- 所蔵品紹介



桃色地山道模様摺箔

能面と能装束

— 武家の式楽 —

2月11日(木・祝)～3月7日(日)
会期中無休

前田育徳会
尊經閣文庫分館
第2展示室

学芸員の眼

昭和十二(一九三七)年六月、金沢市の丸越ホールで、弘化勸進能(一八四八)で大夫を勤めた十五世宝生友于(紫雪一七九九～一八六三)の七十五周忌を追善する展覧会が開かれました。友于は、隠居後金沢に居たとされることから、「紫雪さん」として金沢の能役者たちに、その没後も長く親しまれていました。

展覧会は「能装束と能面」「弘化五年勸進能文献」「紫雪遺品及文献」など四部門・全百二十三点で構成され、この時、三つの『弘化勸進能絵巻』が展示されました。松平伯爵家本、安田文庫本、鴻山文庫本(版本)ですが、これらはそれぞれ描かれる内容に細かな違いがあり、注目を集めました。

今回、本特集では、これらとも異なる前田育徳会本を紹介いたします。先の三本で描かれる舞台の場面が「鉢木」であるのに対し、こちらは「翁」です。「翁」が描かれる『弘化勸進能絵巻』は珍しく、今特集の見どころのひとつといえましょう。

前田育徳会と本館所蔵の能面と能装束を展示す

る、毎年恒例の特集ですが、今年は「武家の式楽」というサブタイトルを付けてご紹介します。

「武家の式楽」とは、江戸時代の武家社会において、能が儀式として用いられたことを意味します。今回の特集展示では、前田齊広(十二代)と齊泰(十三代)の時代の能について、絵巻や史料も交えながら、いくつかのキーワードを設けてご紹介します。能面と能装束が用いられた時代を、より深く理解していただくとするものです。

『能装束の畳紙』

能装束が納められた当時の畳紙には、様々な情報が記されています。番号や装束の種類・模様に加え、裂の由来、仕立てられた理由が記されることもあります。こうした畳紙から、齊泰は、特に近しい人々より裂を贈られ、装束を仕立てていたことがわかります。中でも、齊広の室であった真龍院より贈られた裂は多く、前田家の慶事には裂が贈られ、仕立てられた装束を身に付けて舞い、それを披露する、ということが行われていたようです。

『申楽免廢論』

『申楽免廢論』は、齊泰が弘化二年(一八四五)に著したものです。父・齊広の下、幼い頃より能に親しんだこと、脚気を患った際、能を舞うことによってそれを治癒させたことなど、自らの能に対する思いが記されています。

『弘化勸進能絵巻』

幕末のこの時代、五座の中でも最も勢いのあったのが、宝生流です。江戸時代の最後を飾る勸進能が宝生流によって行われたことも、これを物語っています。この勸進能の様子は、絵巻として描かれ、版本も多く刷られました。絵巻には、舞台だけでなく、櫓がそびえる光景から、楽屋の慌しさ、棧敷の賑わいまで描かれています。

石川県の工芸

2月11日(木・祝)～3月7日(日)
会期中無休

石川県は、美術工芸活動の盛んな地域として知られていますが、とりわけ藩政時代より培われてきた工芸技術は、高い水準を保持し今日まで受け継がれていることができます。確かに一時期、明治維新における幕藩体制の崩壊によって、強力な庇護者であった前田家を中心とする武家社会が消滅し、伝統の技の存続が危機に瀕することはありました。しかし、当時、国策としてうたわれた殖産興業政策にのっとり、たとえば明治五年、金沢に開拓所が設置され維新で失業した細工所の職人を救済する措置が施されたことに象徴されるように、その水脈は多くの志ある人々によって保たれていきました。

明治期以降、今日に至るまでの石川県の工芸作品を見ていくと、その作風にそれぞれの時代が反映されているようです。大ざっぱに見ていけば、明治期に特徴的な超絶技巧による過剰ともいえる

装飾表現は、輸出用の東洋趣味が顕著に示されているといえます。また、大正から昭和戦前期にかけては、工芸職人の間から作家的意識を持つ人々が現れ、鑑賞を目的とした工芸作品が生み出されていく時期でした。そして戦後は、伝統技術を受け継ぎ活かしながら、新しい意匠表現に取り組む作家や、従来の用途に限定されない、より造形的、革新的な表現を追求する作家など、多様な創作活動が行われ、今日に至っています。

当館では、昭和六十年に「特別陳列 明治の工芸」を開催して以来、それまでまだ全国的に注目されることのなかった明治期の工芸にスポットを当てるとともに、当県の代表的な工芸作家の作品を積極的に収集・展示してきました。本展では、そうして収集したコレクション及びご寄託いただいている作品の中から、近現代の当県ゆかりの優れた工芸作品を一堂に展示いたします。



「金銀象嵌牡丹唐草文蠟燭台」 銅器会社

書家 青山杉雨

2月11日(木・祝)～3月7日(日)
会期中無休

昭和十年代後半の書道界は、文字を形よく書くのが書であるという、書道界に一般的だった認識が、書とは作者の教養や生活から分泌されるものであり、その時代の象徴である、という根本的な変化を迫られた時代でした。清の金石書法に基づく、いわゆる碑学派としての西川寧の書法は青山杉雨に受け継がれ、やがてそれは文人趣味に立ち、書に対する歴史観を踏まえて、力強く古典文字を書く杉雨書法に結実したといわれています。

今回の特集では杉雨の養母の出生地である穴水町のご協力を得て、晩年の作品を中心に展示させていただきます。杉雨の書の特徴は感覚的な表現

主義という点に求められますが、杉雨の感覚がとらえようとしたのは、近代の文化空間の質といていいものでしょう。

そこには次第に解体していく文人精神をモダニズムの中に蘇生させようという意図が認められます。その意味で杉雨の大字、少字数のスタイルをとる古典文字の書は、単に失われた文字を再現するのではない、それはあくまで書の本質を踏まえながら、現代における書のありようを模索し昭和の書を構築するという使命を担ったものと位置づけられています。



「独嘯」 青山杉雨

大名の嗜み

— 茶の湯と文房具 —

遠き道展

— 伝えたい日本画の今 —

今年が寅年ですが、展示室では「松下飲虎図」、いわゆる岸駒の虎が皆様をお待ちしております。虎は龍と対で描かれることが多く、権力者が好む画題であり、方位の守護でもあります。本図は龍を水で暗示した「龍虎図」に、松に二羽の鶴を組み合わせて長寿の喜びを表す「報喜図」として、寅年の新年を飾るに相応しい大幅の「吉祥図」です。



「松下飲虎図」 岸駒筆

「現代日本画の紹介」と「視覚に障害のある方の平面鑑賞の試み」という二本の柱で開催してきた「遠き道展」。会期中皆さんに楽しんで頂いた出品作家によるギャラリートークも最終日に予定されています。お招きする講師は、昨年日本芸術院会員に就任された土屋禮一氏、そして若くから閨秀の呼び声も高く現代日本画をリードしてきた松生歩氏です。どうぞお聴きがしなく。

ギャラリートーク

二月七日(日)

十四時～

土屋禮一氏
松生 歩氏



「榎樹」 土屋禮一

2月前半の展覧会

1月4日(月)～2月7日(日)会期中無休

近代彫刻におけるモデリング(彫塑)の仕事について、用いる素材や技法の観点から眺める展示です。モデリングの仕事は、多彩な技法の展開と多様な素材との対話、またものによっては高度な工芸技法の上に成り立っているものも少なくありません。蝟型鑄造・ブロンズ・テラコッタ・石膏・乾漆・FRPなどに及ぶ多彩なモデリングの世界を御覧下さい。



「纏」(FRP) 坂坦道 作 S.47 (1972)

初釜の季節に合わせ、前田家伝来の「黄天目茶碗」や「濡鷺釜」、この地に縁が深い高山右近の書状、また本多家伝来品などの「加賀藩関連の伝来茶道具」、「千叟宗室と加賀―大樋焼と寒雉の釜」、「初春を寿ぐ」を柱に、当館の所藏品・寄託品の中から五十五点を展示します。前田育徳会尊經閣文庫分館の展示作品と合わせて、茶の湯の美をお楽しみ下さい。



「黄天目茶碗」 前田家伝来

第4展示室

モデリングと素材との対話

第2展示室

茶道美術名品選

第7展示室

金沢大学教育学部
美術教室卒業・修了制作展

2月18日(木)～21日(日) 会期中無休

◇入場無料
◇連絡先

金沢市角間町
金沢大学教育学部美術教室

TEL 〇七六一二六四一五五八五
松浦昇

絵画、彫刻、デザイン、工芸、美術教育の各分野の学部、大学院生による平成二十一年度卒業・修了作品を展示します。これらは、多様な分野へ進出を目指す学生達が、自らの学生生活の総決算として地道に努力を重ね、且つ創造的に研究し制作して完成させたものです。展示点数は数十点、是非ご覧下さい。そして忌憚のないご批評、ご助言をお願いします。

第7～9展示室

第33回
金城大学短期大学部
美術学科卒業制作展

2月11日(木・祝)～14日(日) 会期中無休

◇入場無料
◇連絡先

白山市笠間町一二〇〇
金城大学短期大学部

TEL 〇七六一二七六一四四一一

本学美術学科の「卒展」も三十三回目を迎えます。日本画、油画、デザイン、メディア造形、ファッション・染色、陶芸・オブジェ、マンガ・キャラクターの七コースの学生及び研究生八十五名の作品約二百点を展示します。近年は映像に独自の音楽をつけたマルチな表現や、時代を先取りしたストーリーリーマンガも見られます。若い感性が、それぞれのジャンルで何を学び得たのか、ご高覧の上厳しいご批評を戴けますれば幸いです。

◇入場無料
◇連絡先

金沢市末町一〇
金沢学院大学美術文化学部

TEL 〇七六一二二九一八七七五
担当者：香林春奈

本学美術文化学部美術工芸学科（日本画・洋画・陶芸・漆芸）、情報デザイン学科の卒業制作、美術文化専攻修了制作、また文化財学科卒業研究の成果を発表いたします。ご覧いただき、忌憚のないご批評を下さいますようお願いいたします。

2月行事予定

「遠き道展」ギャラリートーク

七日(日) 十四時～ 一階企画展示室 観覧料が必要です。

講師：土屋禮一氏(日展理事、芸術院会員)、松生歩氏(京都造形大学教授)

土曜講座 十三時三〇分～ 本館講義室 聴講無料

13日(土) 「明治の工芸 ― 絵画的意匠の魅力 ―」 西田孝司 学芸専門員

20日(土) 「能装束の畳紙たとうにみる加賀藩主の能」 村上尚子 学芸主任

27日(土) 「戦後の絵画」 織田春樹 学芸主査

ビデオ上映会 十三時三〇分～ 本館ホール 入場無料

21日(日) 「うつわに託す 大西勲の髹漆」(35分)

第7～9展示室

第7回
金沢学院大学美術文化学部
卒業研究制作展

2月24日(水)～28日(日) 会期中無休

平成22年度 友の会会員募集

3月1日(月)から受付開始!! 来館できない方は郵便振替で
現会員の方で継続をご希望される方も、改めてお申し込み下さい。

一 募集定員 一、五〇〇名

二 会 費 二、〇〇〇円

三 受付期間 三月一日(月)より開始。
募集定員に達し次第締め切り。

四 入会手続き 次のA、Bいずれかの方法。

A 直接来館してのお申込み

・ 会員証…その場で発行。
・ 場 所…一階ロビー

情報・図書コーナー

・ 申込方法…会費(現金)と下図①の入会
申込書に所定事項を記入
して提出。

・ 受付時間…午前九時三〇分～午後六時
(休館日を除く)

※展示替えによる三月の休館日は、
八日(月)・九日(火)と
二十八日(日)～三十一日(水)。

B 郵便局からのお申込み

・ 会員証…三月末から美術館日よりと
共に郵送。

・ 申込方法…下図②の払込取扱票に所定
事項を記入し、最寄りの郵
便局(ゆうちょ銀行)窓口
にて支払い。

払込手数料(窓口一二〇円・
ATM八〇円)は申込者負担。

・ 注意事項…左図①の申込書を郵送する
必要はありません。

払込取扱票の受領証は、会
員証が送付されるまで大切
に保管してください。

◇郵便局(ゆうちょ銀行) 備え付けの振替
用紙をご使用の場合、口座番号・加入者
名・通信欄に左の事項を記入して支払い。
郵便振替口座
0070007146490

加入者名 石川県立美術館友の会
通信欄記入事項
年齢、性別、会員の区別(継続・新規・
元)、職業、継続会員の方は現在の
会員番号

五 その他

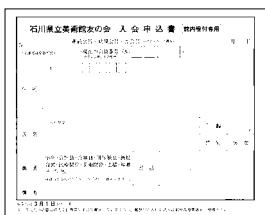
◇会員証の有効期限…平成二十二年四月一
日～二十三年三月末日

◇会員証の対象…記名者本人のみ
(ご家族の方との連名受付はなし)。

◇一度納入された会費の返金は不可。
◇会員証紛失による再発行は受け付けない。

今回同封した入会申込用紙です。

(参考見本)



①来館受付専用



②郵便申込専用(ご使用の場合には、必ず郵便局(ゆうちょ銀行)窓口へお出しください。)

会員の特典

◎コレクション展に何度でも無料で入
場可(要会員証・会員本人のみ・
二十三年三月末まで)

◎企画展入場券進呈(春期・秋期・冬
季二回の企画展のいずれか一回に無
料で入場可)

◎企画展の開会式ご招待

◎入館料の割引(要会員証)

① 同伴者二名まで、コレクション展、
企画展観覧料が団体料金なりに割引。

② 石川県立歴史博物館、石川県七尾美
術館、石川県輪島漆芸美術館、石川
県九谷焼美術館、石川県能登島ガラ
ス美術館、金沢21世紀美術館の各館
主催展覧会でも同様の扱い(同伴者
割引なし)。

◎館主催諸行事(現地見学・バスツ
アー・講演会・ギャラリートーク
等)への参加

◎館の最新情報をお伝えする『石川県
立美術館だより(本誌)』(毎月一日
発行)を毎月郵送

石川県移動美術展

今年度は白山市で開催!!

二十三回目となる今年度の移動美術展は、白山市で開催することになりました。これまで能登地方を中心に、また加賀方面でも行ってききましたが、白山市での開催は初めてとなります。白山市は、平成十七年二月、旧の松任市、美川町、鶴来町、河内村、吉野谷村、鳥越村、尾口村、白峰村が合併して誕生し、白山麓から日本海に至る広い面積を占めています。会場は、鶴来総合文化会館クレインで、同じ白山市といっても白山の麓に住む人達にとっては、かなり遠く、また二月のまだ寒い時期にあたるのですが、一人でも多くの方にご鑑賞いただければと思っています。

出品作家は、白山市出身の梶野玄山（日本画）、奥田憲三（油彩画）、オクヤナオミ（アクリル画）、中村秀雄（アクリル画）、桒谷次郎（油彩画）、山下晴子（彫塑）、山本力吉（彫塑）、原峯水（染織）、橋本仙雪（木竹工）といった作家に加え、石川義（日本画）、山本知克（日本画）、鴨居玲（油彩画）、高光一也（油彩画）、宮本三郎（油彩画）、松田尚之（彫塑）、吉田三郎（彫塑）、北出不二雄（陶磁）、寺井直次（漆工）、高橋介州（金工）など、石川県を代表する作家の作品、さらに江戸時代の歌川広重・国貞・国芳の浮世絵版画など、県立美術館が所蔵する優品約五〇点を一堂に展示いたします。どうぞご期待下さい。

会場 白山市鶴来総合文化会館クレイン

(白山市七原町七七番地)

TEL〇七六一二七三七八七〇〇

会期 平成二十二年二月十九日(金)～

二十八日(日)

会期中無休 午前9時～午後5時

(入館は午後4時30分まで)

観覧料 一般二〇〇円・高校生以下および

障がい者は無料



移動展会場クレイン外観

ミュージアムレポート

県内の学校に当館所蔵品と学芸員による授業を上前する、学校出前講座「どこでもミュージアム」。今回は十一月と十二月の開催分の四校を紹介いたします。

昨年猛威を振った新型インフルエンザ。世間をお騒がせしただけでなく、学校現場には多くの実害をもたらしました。私たちが訪れた学校でも、十八クラス中で学級閉鎖にならなかったクラスが一クラスだけだったというところもありました。そのような状況はこの出前講座にも少なからず影響を与えました。学校の先生や我々学芸員がマスクをしたまま授業をするということもありました。

それでも参加してくれた子ども達は皆元気で、大いにこの「どこでもミュージアム」を堪能してくれました。会場に足を踏み入れ、実物を目の当たりにした子ども達の瞳の輝きや歓声は、この事業の可能性を如実に物語るものです。作品保護のため暖房もしていない会場も、寒さを感じさせない子どもたちの熱気に満ちていました。

能美市立浜小学校 十一月十七日(火)

六年生四クラスに出前授業。

白山市立松任中学校 十一月二十五日(水)

二年生八クラスに出前授業。

白山市立松南小学校 十二月十一日(金)

四年生三クラスに出前授業。全年齢が五・六限に鑑賞。

羽咋市立邑知中学校 十二月十六日(水)

二年生二クラス、三年生二クラスに出前授業。



羽咋市立邑知中学校



白山市立松南小学校



白山市立松任中学校



能美市立浜小学校



作者は、大正八年加賀市に生まれ、養父・北出塔次郎に陶芸を学び、昭和二十五年金沢美術工芸専門学校（現・金沢美術工芸大学）陶磁科を卒業しました。同年、日展に初入選、以後、研鑽を積んで入選・受賞を重ね、現代の九谷陶芸界を代表する作家としての地位を確立しました。その作風は、九谷の伝統に根ざしながら、幅広く奥深い陶技を示すものです。現在、日展参与。元・金沢美術工芸大学学長。

作者はペルシア風な彩陶、陶彫などによる立体的な表現など、斬新な試みも行っていますが、この作品は古九谷、それも器面のほとんどを、緑、黄、紫などの色で塗り埋める、いわゆる青手の作風を示しており、九谷上絵の伝統的技法を現代的な感覚で表現したものです。

緑を基調とし、齒切れの良い筆致の積み重ねによって唐草を空間いっぱい描き、三箇所配された白く丸い窓の上に、三羽の小禽を黄彩で表現しています。唐草は、器面の口縁部から内側に向かって、弧を描きながらその蔓を伸ばし、律動感にあふれています。また、唐草の周りを黒呉須で塗りつぶすことで森の深い暗闇を思わせ、一方、小禽の部分に残された素地の白さは、木立の隙間から注ぎ込む太陽の光を感じさせるようです。同じように見える草の葉も、一枚一枚その形が異なり、さらに小禽たちは、真っ直ぐ前を向き静かに佇んでいるもの、少し小首をかしげたような仕草を見せるもの、何かの気配を感じ振り向くものと、それぞれの姿態に変化をもたせているのがわかります。緑彩と黄彩の古九谷の伝統的色彩表現を駆使しながら、意匠は決して形式的にならず、むしろ自由で伸びやかな作者の感性が発揮されている作品といえましょう。

次回の展覧会

前田育徳会尊經閣文庫分館	第2展示室（古美術）	第3展示室	第5展示室（近現代工芸）
書院を飾る I — 絵画と調度 —	加賀の俳人たち — 軽妙な俳画の世界 —	三浦 泉展	石川県の工芸
			ご利用案内
			コレクション展観覧料 — 一般 350円(280円) 大学生 280円(220円) 高校生以下 無料 ※()内は団体料金
			今月の開館時間 午前9:30～午後6:00 カフェ営業時間 午前10:00～午後7:00
— 2月の休館日は8日(月)～10日(水)です —			
石川県立美術館だより 第316号		〒920-0963 金沢市出羽町2番1号	
2010年2月1日発行(毎月発行)		Tel:076(231)7580 Fax:076(224)9550	
		URL http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/	